



子どもたちによるポスター発表

世代や立場を超えて科学する面白さを共感する舞台をつくる 誰でも何でもありの発表会「共生のひろば」

小学生からレジェンドまで、立場や世代を超えて誰もが自由に自然環境や地域活動について発表できる会合「共生のひろば」。参加はもちろん無料で審査はないが短い論文は必ず書いてもらう。元大学教授らのチームが高度な内容で発表する隣で、小学生が気の利いた緻密な研究で挑み、その隣では見事な芸術作品を飾る主婦が容赦なく聴衆を集める。そんな光景が展開される。取り組み始めて12年、毎年100名以上の方が「地域の知」を発表する舞台となる「共生のひろば」について紹介する。

■地域の知が結集し共有することを目的に

共生のひろばとは、自然や地域活動をテーマとして、だれもが自由に参加できる発表会です。何か公園のような“ひろば”がある訳ではなく、調べた内容を持ち寄って発表し、そこで多くの人達と意見交換や交流することを目的とした学会風の会合です。毎年、2月11日(祝日)に当館で開催してきました。2016年度で12回目となり、およそ80件が発表され、1000人近い聴衆が集まりました。里山に生息する生物相をしっかり調査した発表もあれば、顕微鏡で成長観察した記録、環境

保全活動の実践事例、化石のレプリカづくりの新しい方法、環境教育の教材づくりや美しい植物画の描き方講座など、発表内容は多岐に及んでいます。発表される方は、小学生から高齢の方まで幅広く、高校の部活動や大学の研究室、企業、行政の方など、世代や立場も多様で、ごく最近始めたばかりの方から、10年以上調べ続けている方までいました。

共生のひろばでは、多様な人々が一堂に集い、地域の自然や環境に関する発見や取り組み事例を発表する場をつくり、地域の知が集積し、共有することを目的

としています。まるで、中央卸売市場のように、色々な知恵と知識と人が集まる流通の場となり、様々な素材が再び各地へと流通することが理想です。12年前に、共生のひろばを始めるにあたって、「魚市場」がモデルイメージで、「共生の市場」という案がありましたが、間違っていて買い物に来られるとまずいので、当時のリーダーだった田中哲夫元研究員による命名で「共生のひろば」となりました。発表内容は、きっちりと記録に残して流通するように、必ず要旨集を作成しています。古い要旨集の内容は、時折、学術論文や各種報告書にも引用されるようになりました。

■ポスター発表中心でテーマの多様性を確保

共生のひろばの開催方法も、最初の頃から様々な面で改善されています。一番大きな変化を挙げると、11回目からは口頭発表を大幅に減らして、ポスター発表を中心とすることで、より多くの方が発表し、交流の時間を長く確保できるようになった点です。こうした背景には、テーマの多様性を保つことがあります。3回目ぐらいまでの会合では、舞台での演劇やコレクション自慢、幼児教育の実践成果の発表など、非常に多様なテーマがあったのですが、会を重ねるごとに発表内容が高度化して、学会で発表しても十分に通用するような学術的な内容が増加。このこと自体は喜ばしいのですが、その反面、初めて発表する人やユニークな取り組みが、どうしても発表しにくくなります。裾野が狭くなることは本意ではありません。電話での問い合わせで「小学1年生が夏休みに調べた内容ですが発表してもいいですか? 昨年の例をホームページで見たら敷居が高いのですが」といった類の不安を良く聞くようになりました。この課題を解決するにも、ポスター発表方式が向いています。自由なスタイルで発表できて、多くの方々から建設的な意見をもらい、新しい気づきと共感者との出会いの場となります。それと同時に、それぞれの研究員がアドバイスすることに加え、出来るだけ多様なテーマに取り組んでいる方や団体に声掛けして参加を呼びかけています。こうした甲斐もあって、テーマの多様性を再び確保できるようになったと思います。

すぐれた自然史研究の背景には、地域の人々による「共有知」や「気づき」がきっかけになっていることが少なくありません。兵庫県内でも、丹波の恐竜化石、コウ

ノトリの生態、絶滅危惧種の発見や外来種の侵入、ダイオウイカの漂着など、地域の眼と市民の科学力が研究や地域活動の大きな駆動力となっています。先端科学の分野では、研究インフラと言えばスーパーコンピュータや大型放射光施設などが思い浮かびますが、自然史の分野では、こうした機器だけでなく、地域での知の集積や市民科学者の裾野の広がり、いわば地域力そのものが研究を支えるインフラとなります。研究の成果を活かして地域の活動へと繋げる、逆に地域での発見や取り組みから優れた研究が生まれる、そんな双方向性と相互関係が生み出される基盤づくりが社会教育施設としての博物館の役割です。多様な立場の人々が、「地域の知」を情報発信して共有する場、より多くの方が理解し共感できる場をつくることが求められます。子供から高齢者、専門家や自然観察をはじめて1年目の方、企業や役所の方など、様々な立場と世代を超えた発表・交流の場として「共生のひろば」が引き続き発展するよう、ひとはくの総力で取り組みたいと思います。



1.ポスター発表 2.口頭発表 3.茶話会 4.表彰式